

## ■変わる大学入試

本日は、高大接続改革についてお話ししたいと思います。こちらは 2014 年に出題された東京大学理科 1 類の小論文の入試問題です。「どうやって答えればいいのか」という疑問がまず頭に浮かんだのではないのでしょうか。

従来の入試であれば、日本の現在時刻から時差を利用して海外の時間を計算させる基本的な問題に続いて、時差を利用したビジネスにはどのようなものがあるか説明させる応用問題が出されていたのではないかと思います。このような問題であれば、授業で習った知識が身に付いていれば正解にたどりつきませんが、今紹介した問題はそれだけでは対応できない問題です。また、答えも一つだけではありません。

これからは、単に知識を問う問題とは違い、知識やスキルを活用し、様々な角度から考え、今までにはなかった答えを導き出す、そういった思考力が要求される問題が多く出されるようになると思います。このように、大学入試の在り方が大きく変わろうとしています。

**「もし、地球が東から西に自転していたとしたら、世界は、現状とどのように異なっていたと考えられるか、いくつかの観点から考察せよ」**

2014年 東京大学理科1類

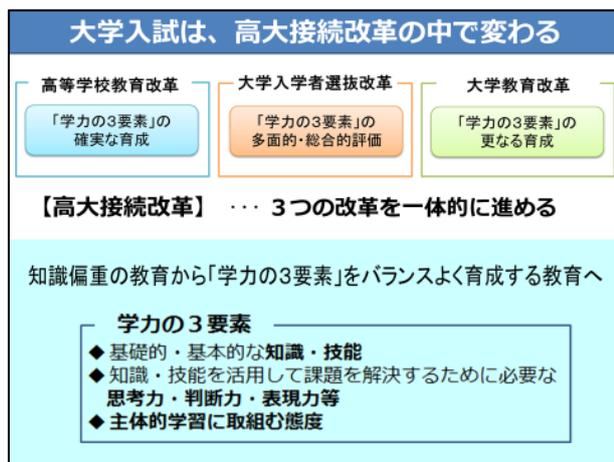
**知識とスキルを活用し、今までには無かった答えを導き出す思考力が必要**



## ■大学入試は、高大接続改革の中で変わる

大学入試の改革について、すでに様々な報道がされています。この改革のねらいは、知識偏重になっている現行の入試を、「学力の3要素」について多面的・総合的に評価する入試に改善することです。そして、入試の改革だけでなく高校の教育と大学の教育もそれぞれ「学力の3要素」をバランスよく育成しようとする改善を一体的に行うことをめざしています。この3つをまとめて「高大接続改革」と言われています。

今年の7月には、文部科学省が2020年度からセンター試験に代えて行う「大学入学共通テスト」の実施方針を発表しました。国語や数学では、従来の選択肢問題に加えて3問程度の記述式問題を追加する方向でモデルが示されています。また、英語では、「読む」「聞く」に加えて、「話す」「書く」の4技能を評価する方向に転換され、英検やTOEIC



といった外部検定試験の活用が検討されています。こうした大学入試改革の流れは、すでに様々な方面に影響を与えています。

### ■「実社会とつながった」出題—中学入試でも

こちらは、大阪の私立中学校、香里ヌヴェール学院で出題された入試問題です。今回の学習指導要領の改訂の目標である「より良い学校教育を通じてより良い社会を創る」を念頭においた出題だと思います。実際に、子どもたちの解答では、いくつもの個性的な解答があったようです。例えば「自動販売機でおむつを売ったらいいのでは」とか、「お年寄りのために背の低い自動販売機をつくってはどうか」という解答です。それから、「AI に相談しながら買う物を選べる自動販売機」という時代を象徴した案もあったようです。この問題を出題した学校長は、「自分の人生をどう生きるかには正解がない。学校では、もちろん正解のある学びも必要だが、正解のないことに対して、もっている知識やスキルを組み合わせる最適解を出せる力を育成することがとても大切である」と述べています。

「最適解を出せる力」が大切であるという指摘でしたが、私は別の視点でも同じことを感じています。子どもたちは将来、今よりもさらにグローバル化が進んだ社会で生きていくこととなります。海外の国では、民族・文化・宗教が異なる人々が国を構成しており、自分というものをもち、はっきりと主張していかなければ、生きていくことができないと思います。そういう国では、自分たちの意見を主張するだけでなく、どこかで共通項を見つけ出しています。主義主張は一人一人異なりますが、それをまとめ、納得解を創り出しているのです。これから国際社会に出ていく子どもたちにはそういう力が求められます。

より良い学校教育を通じて、より良い社会を創る

「より良い社会のために、あなたがこれから新しい自動販売機をつくるなら、どのような自動販売機をつくりますか。また、なぜそう考えましたか。理由も含めて200字以内で書きましょう。」

香里ヌヴェール学院中学校

### ■自分軸とクリティカル・シンキング

もう一問大学入試に出題された問題を紹介します。こちらの慶応義塾大学医学部で出題された問題は、まさに「正解のない『問い』」そのものといえると思います。受験、友人関係、病気など、親友がどのようなことで落ち込んでいるのかは、解答者が決めるもので、もちろん「正解」はありません。何を選んでも間違いにはならないからこそ、自分の考え方をアピールできる切り口を設定しなければなりません。

正解のない「問い」に対して答えをどうやって出すのか

「親友と最近連絡が取れません。どうやら、親友はひどく落ち込んでいるようです。何度か連絡を試みた結果、ようやく明日親友と会って話すことになりました。そこでは、どのようなやりとりが二人の間で繰り広げられるでしょう。二人のやりとりを対話形式で解答用紙のA欄に、そして、そのやりとりの中であなたが意図したことをB欄に述べなさい。」

2008年 慶応義塾大学医学部 小論文

「正解のない『問い』」に対して、複数浮かんだ答えの中から、自分が選んだ答えが本当に解答としてふさわしいか、自分が言おうとしていることが論理的な考察に基づく答えなのか、もう一度あらゆる角度から見直してやる必要があるようになってくると思います。そして、論理的かどうかだけではなく、自分のこだわりたいものは何か、つまり、「自分軸」をもつことが大切になってくると思います。そしてこの問題を解くためには、自分の答えが正しいのか、もう一度疑問を持ち、異なる視点から確かめる「クリティカル・シンキング」も求められます。

「自分軸」に照らし合わせると、「これかな」という答えはでてくるでしょう。しかし、様々な考え方が正解となり得る問題ですから、相手に説明するためには自分の回答の背景に確かな価値観があることをアピールする必要があります。自分が言おうとしていることが論理的な考察に基づく答えなのか、もう一度正しいのかどうか、あらゆる角度から見直してやるのが大事です。

### ■学び続ける教員に

では、「自分軸」を持って、答えを出せる子どもたちを育てるためには、教員は何ができるでしょうか。

教員のこれからの役割はもう「教えること」ではないと思います。知識を一方向的に教え込む教育から、子どもたちが自ら学び、自ら考える教育へと転換しなければなりません。つまり、これからの教員に求められているのは、「支援し、引き出せる場」を創り出す、ファシリテーターのような役割を果たすことだと思います。

子どもたちにとって、学校生活は人生の一部でしかありません。学校で教わったことは、その後の長い人生で役立つものでなければいけません。変化の激しい社会を生きていく子どもたちにとって真に必要なものとは何かという問いに教員は立ち向かっていかなければならないと思います。

未来を生きていく子どもたちのことを考えると、教育は確実に変わらなければいけません。そのためには、教員自身が社会の変化に対応すべく、自ら学び続ける努力を惜しまないことが大切だと思います。

